

近世戦衣における木綿及び皮革の使用実態

長崎 巖

はじめに

平成23年度総合文化研究所研究助成「近世戦衣の素材・技法・意匠における外国染織の影響に関する研究」において、近世初期に完成され、江戸時代を通じて制作された陣羽織を中心とする戦衣の素材・技法・意匠における外国染織の影響について、現存遺品の実地調査、文献資料を用いた情報収集を中心にすえて、現存遺品に見られる素材が外国のどのような地域からもたらされたのか、技法や意匠がどこの国の染織品の影響を受けているのか、形状や仕立てに外国のどの服飾の影響が反映されているのか、などを検証した。

また平成27年度総合文化研究所研究助成「近世小袖服飾に見る伝統的素材・技法に関する研究」（研究代表者・田中淑江）においては、小袖とその周辺の染織品にどのような染織素材が用いられ、どのような技法で模様が表されているかなどを知ることがを目的として、近世染織品について幅広く作品調査や文献調査を行った。

これらの研究に伴う作品調査の中で、近世初期、桃山時代（註1）から江戸時代初期においては、上級武将の戦衣の一部に木綿が使用されていることを発見した。木綿の日本における流通については、文献から桃山時代とする説があるが、現存する作例はこれまで皆無に近く、その実態は明らかではないのが実情である。また木綿の庶民への実質的普及が18世紀初頭以降と推測されるにも関わらず、それ以前の木綿の使用に関する研究はまったく行われていない。

平成30年度総合文化研究所研究助成「近世戦衣における木綿及び皮革の使用実態に関する研究」では、武将の戦衣における木綿の使用実態を調査することで、当初輸入品から始まったと考えられる木綿布の使用が具体的にどのような形で行われていたのか、また国産の木綿がその後どのようにしてこれに取って代わっていったのかを明らかにすることを主たる目的としつつ、同じくその耐久性と強度から戦衣に多用された皮革についても、実際にどのように使用し、他の繊維素材とどのように組み合わせて使用されたのかを明らかにすることを目指した。

1. 戦衣における木綿の使用

武家男性の服飾で、武家の「もののふ」としての本質を最も明確に象徴する染織品として、小袖の上に着用する胴服や、戦時に鎧の上に着用する陣羽織、鎧の下に着用する鎧下着や裁付袴・カルサンなどをあげることができるが、特に陣羽織は、戦国時代に当世具足が出現したのに伴って、その上にこれを着用して防雨、防寒に備えたのがその始まりと言われている。

従って、室町時代末期から桃山時代に着用された初期の陣羽織には、紙や麻などで作られた実用一方のものが多く、陣羽織が次第に、武人が戦場で最後を飾る晴れ着としての意味とともに、身

分や財力の象徴としての役割を持つようになってくると、さらに装飾性が加わって、生地や形状・模様などに様々な趣向を凝らしたものが作られるようになった。

こうした状況のもと、室町時代末期から江戸時代初期にかけてのいわゆる戦国時代において、実用性と希少性が注目されるようになった木綿の使用がどのように始まったのかを明らかにするために、この時期に制作されたと考えられる現存遺品の調査を集中的に行った。なお、木綿は、江戸時代に入って国産化が進み、希少性が低下したことから、江戸時代中期以降は、主に上流武家を着用者とする陣羽織にはほとんど使用されなくなった。ただ通常の使用で実用性が求められる道中合羽や馬乗り羽織には用いられた。このことは、木綿の実用性を裏付けるものであり、戦が日常茶飯事であった桃山時代においては、その実用性において大いにもてはやされたであろうことを推測させる。

(1) 吸水性に富む、(2) 濡れると10～20%強度が増す、(3) アルカリや熱に強い、(4) 染色しやすい、(5) 弾力性、伸張性に富む、(6) 繊維断面が中空構造のため、軽く保温性に富み肌触りが良い、などの特性がある綿布は、戦場で過ごす時間が長かったこの時代の武家にとって非常に有益な繊維素材であり生地であったので、戦場や陣中、または移動中に着用する鎧下着や胴服などに用いられたとしてもごく自然なことではなはずであり、文禄年間(1592～1596)頃には大量の木綿の種が大陸から輸入されていたともいわれるが、実際に木綿を用いて仕立てられたそうした遺品は皆無に近い。

輸入木綿は、南蛮貿易によって、中国だけでなくインドやインドネシアからも生地や染色された製品がもたらされた可能性が想定される、桃山時代の遺品は、インド産と推測される木綿のキルト地を用いて仕立てた豊臣秀吉(1536-1598)所用の白木綿地桐紋付陣羽織がほぼ唯一の遺例である。

寛永5年(1628)には幕府が、「百姓の衣服に使用してよいのは布木綿まで、名主及び百姓の妻女は袖まで使用していいが、それ以上の贅沢は許さない」という触れを出していることから、木綿が庶民レベルまで普及し始めるのはこの頃と思われるが、実際には木綿を生地とする庶民の染織品の17世紀までさかのぼる遺品は管見の限り現存していない。

翻って桃山時代から江戸時代初期の服飾に焦点を絞ってみると、木綿地で仕立てられた衣服の現存遺品は皆無に等しいが、吸湿性がよく耐久性にもすぐれている木綿を、戦国時代の武将や下級武士たちは、戦衣ほか様々な実用的用途に用いたと推測される。しかし国産品は質も悪く生産量も多くはなかったらしく、室町時代末期から桃山時代には、武将クラスの武家が朝鮮半島から輸入された品質の良い綿布を、また足軽など下士は国産の質の悪い木綿をそれぞれ衣服に用いていたと推測される。『総合文化研究所紀要』第23号(2017年)において論じた「浅葱木綿地月丸扇模様羽織」は、そうしたうちの後者に当たると考えられる(註2)。

2. 木綿が袴の腰紐に使用されている事例

戦衣における木綿の使用実態を調査・研究していく中で、木綿が非常な希少性を持っていた時期に、木綿が戦衣の実に意外な部位に使用されていることを発見したので、まずはこれについて具体

的に述べる。いずれも桃山時代の制作と推定される袴の腰紐に、木綿が芯として使用されている事例である。そもそも桃山時代の戦衣に使用されている木綿についての先行研究はなく、従って袴の腰紐におけるその使用についての報告もないため、比較する資料を持たないが、袴の調査の過程で発見したものである。

2.1 東北大学所蔵・伝豊臣秀吉所用袴について

一点は、東北大学図書館所蔵の東北大学秋田家史料に含まれる豊臣秀吉所用と伝えられる袴である。

袴自体は、はわずかに緑みを含んだ茶色の五枚縹子を表地に、紅平絹（練緯）を裏地に用いて、袴仕立てに作っている（図1）。破損が著しく当初の形状を必ずしも正確には推し量れないが、近世において「カルサン」と呼ばれた、南蛮風の袴に幾分類似した形状をなす袴である。

前腰と後腰には、太く撚った木綿糸を平らに並べ、これを表地の共布で包んだ腰紐を付けている。台形をなす後腰の腰当ての部分は、薄い正目の板を和紙で両側から挟み、これを芯にして、表地と裏地の間に入れている。腰当てのそれぞれ左右に上記の腰紐を挟み込むように付けるが、腰板の部分では、多くの木綿糸を合わせて作った一本の太い木綿紐で左右の腰紐を繋いでいる（図2）。

現状で前腰裏地に6枚の襷を確認できるが、表地の欠損が著しく、正確には確認できない。また外見上、裾口が幾分小さくなっているように見えるが、これも表地の破損が著しく確認できない。同じく現状では、足首部分を括るための紐は見られない。

裏地の紅平絹は、横切れが著しいことから、経糸に生絹、緯糸に練糸を用いた練緯と考えられる。また縦糸は2本ずつが寄った羽二重経になっているが、こうした特徴は桃山時代の練緯にしばしば見られる。また表地は、鉄媒染による黒染めや茶染めに特徴的な破損状況を示しており、同様の状況は、徳川家康所用と伝えられる胴服や陣羽織の裏地にも見られる（註3）。

外形においてカルサンに類似した部分もあるが、紀州東照宮に伝来する徳川家康所用のカルサンに比すと、裾丈が15cmほど長く、また腰当があるなど、異なる点も見られるため、ここではこの袴がカルサンであるとは言い切れず、通常の袴である可能性もある。一般的なカルサンの特徴は、腿の部分にふくらみがあり、裾口が小さくかつ脛脛辺りまでの裾丈となっているからである。

しかし『太閤記』巻十五、文禄3年（1594）の「秀吉公異彩の御出立にて御遊興之事」には、「出立は、あらまし、きひろ袖のゆかた、志ゆすのかるさん、なんばんづきんをかぶつて」とあることから、縹子地のカルサンが桃山時代に存在していただけでなく、秀吉がこれを着用することがあったことが分かる。

上記の特徴に加え、鉄媒染による生地破損は徳川家康の胴服の裏地にもしばしば見られることから、本作品は、桃山時代の作である可能性が示唆され、木綿がまだ非常に稀少な繊維素材であった桃山時代においては、木綿を非常に限定的に特殊な用途に使用していたことがわかる。

（法量）

前幅 36.5cm

右裾丈（前腰から）85.0cm
右裾口幅 37.0cm
右脇あき（前腰から縫留まで）47.0cm
右相引き（縫留から裾口まで）38.0cm
後腰から縫留まで 38.0cm
右内股から裾口丈 60.0cm
左裾丈（前腰から）87.0cm
左裾口幅 35.0cm
左脇あき（前腰から縫留まで）48.0cm
左相引き（縫留から裾口まで）39.0cm
後腰から縫留まで 42.0cm
左内股から裾口丈 60.0cm
前腰幅32.0cm
紐 右紐 106.5cm 左紐157.0cm 幅2.0cm
後腰幅 28.0cm
腰板 幅11.0cm 高さ10.0cm
紐 右紐 86.0cm 左紐89.0cm 幅2.0cm



図1 袴全体



図2 腰紐の芯の木綿

2.2 島根県立石見美術館所蔵・茶麻地裁付袴について

室町時代から桃山時代にかけて石見（島根県の西部）の領主であった益田家に伝来したもので（註4）、麻地に柿渋を塗布し、刺し子を施した四幅袴（図3）。腰には共裂の腰紐を付けるが、腰紐には浅葱地小紋染の木綿布を芯として入れている（図4）。小紋の模様は、片面糊置きで型付けして表されている。腰背面には木製の板を入れる。

膝からは足首に向かって提灯形にすぼまり、裾口上部には草製のボタンと乳が二カ所に縫い付けられ、膝下には麻の括り紐が縫い付けられている。また前面には小用のための穴があげられている。

前面はふくらはぎから太腿の付け根まで小柄な畳模様の刺し子をびっしりと施し、太腿上面には大柄な格子模様の刺し子を施す。後面は下肢から腰まで畳模様の刺し子を施す。

仕立て上の特徴は、後面において、臀部及び大腿部に舟底形に裁断した生地を当てている点であり、内股部分にもこれよりも小型の舟底形の布が当てられている。こうした仕立ては南蛮服飾の影響を受けて生まれたものと推測され、類似した仕立てが桃山時代から江戸時代前期に制作されたと考えられる裁付袴にも見られる。

この裁付袴は、麻を用い麻糸で刺し子を施しているが、実際に鞍に擦り付けられる部分に刺し子を密に施し、しなやかな動きを求められる大腿部より上には刺し子を荒くしてその便を図っている。また足首に草製のボタンと乳が二カ所付けられているだけでなく、着用における足首の快適さを

図ってスリットも設けられている。

大腿部のフィット性を図って南蛮服の仕立てを取り入れていることに加え、以上のような実用的な工夫をきめ細かく施していることから、この作品の制作時期は戦が日常茶飯であった室町から桃山時代、16世紀後半の作と考えられる。

この袴においては、糸を合わせた紐ではなく裂であるが、前出の袴同様、腰紐には木綿を芯として用いている。

同様の仕立て上の特徴を持つ革製の裁付袴（後述）が、岡山藩池田家伝来の服飾類に含まれている。この裁付袴は、一具をなす革製の胴服及び頭巾とともに池田光政（1609-1682）所用と伝えられるもので、戦国の記憶を残す時期に制作されていることから、仕立てなどにも古様を残していると考えられる。



図3 袴全体

（法量）

丈（腰上部から裾口まで） 90.0cm
 股上（股から腰上部まで） 35.5cm
 股下（股から裾口まで） 65.0cm
 腰幅 26.0cm
 紐長 前紐 162.5cm 後紐 63.0cm
 腰脇あけ（あいびき） 前あいびき 33.0cm
 後あいびき 41.0cm
 膝下紐の位置 裾口から25.0cm
 裾口のスリット 15.0cm



図4 腰紐の芯の小紋染木綿

2.3 林原美術館所蔵・伝池田光政所用革袴について

「光政君 御召一切」と墨書する貼り紙のある木箱に革製胴服・革製頭巾とともに収納されている革袴で、革の表面は松葉を燻して濃い茶色に染めている。革を裁断し縫い合わせて成型しているが裏は付けられていない（図5）。左右足首の二か所には同じ革で包んだ釦と、これを通す穴が設けられている。また股間正面には、小用をに備えた穴が同じく設けられている。

後ろ腰のみ板を両側から革で包んで腰板としている。後ろ腰、前越とも茶染の木綿布を紐状に丸めて芯とし、同じ革で包んで腰紐としている（図6）。

ともに伝わっている胴服と頭巾は革札を縫い付けた実戦的要素を非常に強く持つものであり、光政自身が17世紀前半の戦国の名残が残る時期に生きた人であることと合わせると、この袴も桃山時代の戦衣の実用性をとどめたものと言える。また伝承では岡山藩初代藩主の池田光政所用とされて

いるが、長く一緒にいた父池田利隆のものであった可能性もある。いずれにしても袴の腰紐の芯として木綿が使用されている点に注目される。

(法量)

丈 左83.8cm

股上 42.7cm

腰 26.8、腰板下24.0cm

腰板丈 6.8cm



図5 袴全体

2.4 木綿が腰紐の芯に使用された理由

以上見てきたように、桃山時代及び江戸時代初期においては、木綿は非常に限られた部位にのみ用いられているが、それはこの時期、上質の木綿は入手が困難であり、必要最小限の使用にのみ堪えるだけの需要しかなかった可能性が強い。木綿が持つ前述の特性が知られていたとしても、自由に必要なだけ入手できるというものではなかったのであろう。



図6 腰紐の芯の茶染木綿

木綿が、生き死にがかかる戦場で身に着ける袴の腰紐の芯に使用されているのは、足や腰の動きにとって重要な袴の機能、中でも激しく動く戦闘の際にも緩まず、また終日着用していても疲れないための腰紐の機能を重視してのことと考えられる。木綿は、伸縮性に優れ汗をよく吸うなどの特性を持つことから、このような部位に明確な目的をもって使用されているのである。

高知県立高知城歴史博物館には、山内一豊所用と考えられる紙衣の陣羽織（図7）が所蔵されている。全体に和紙を用いた袷仕立てで、絹の薄綿を入れているが、立襟の部分のみ木綿が使用されている。形状の特徴から明らかに桃山時代の作であることがわかるが、ここでも戦国大名の衣服にあって、木綿が非常に限られた部分にのみ使用されている点に注目される。おそらくこの時代における木綿の使用実態とはこのようなものであったのであろう。



図7 山内一豊所用紙衣の陣羽織

3. 木綿と革を使用した戦衣

皮革がその強度ゆえに人の衣服として用いられた長い歴史を持っていることは今更語るべくもないが、時代とともに生活レベルが上がると、原始繊維に始まって麻や絹と着用において快適な繊維素材が発見され、それらが日常的な衣生活で使用されるようになる。ただ活動の性格から強靱さや耐久性が求められる労働衣や戦衣には、皮革が素材として用いられていた。

野外での戦闘を主な着用途とする戦衣においては、当然ながら皮革が素材とされることが多かった。桃山時代についていえば、紀州東照宮所蔵・徳川家康所用「金唐革陣羽織」、福岡市美術館所蔵・伝黒田長政所用「茶地永楽銭模様革陣羽織」、上田市博物館所蔵・織田信長所用「茶地桐文付小紋染革胴服」などがよく知られているが、これらはいずれも革の防寒機能を活用しようとしたものであり、戦場での直接戦闘は想定していない。

これらに対して、次に紹介する羽織は、革に漆を塗布し、かつその配列や固定方法にも工夫を加えた、実に実践的な衣服となっている。さらに注目すべきは、先に述べた木綿の繊維特性と加工した革を組み合わせ、さらに麻をも適所に用いている点である。

3.1 個人所蔵・紺木綿地革札付羽織について

本作品は、羽織形の外形をなし、表地と裏地に木綿を使用して袷仕立てとし、更に表地には、亀甲型に切り出して漆を塗布した革製の小札をほぼ隙間なく縫い付けている。袖は、袂を付け、袖口を小さく開け、袂のかどを丸く作る。裾はなく、襟が身頃に直接縫い付けられている。襟は首回りから前身頃下部に至るが、前身頃が脇から襟付け部分に向かってやや前下がりに仕立てられているのに対し、襟の下部は水平に仕立てられている。ゆえに、後身頃の丈が前身頃の丈より短い(図8)。



図8 羽織全体

表地と裏地は藍で紺に染めた木綿。間に自然色の麻裂を芯として挟み、表面に黒漆が塗布された牛革と推測される革製の亀甲形(六角形)の小札を縫い付けるが、小札を止め付ける紺木綿の糸は、表地と麻の芯をまとめて縫い通している(図9)。



図9 革小札

亀甲形(六角形)小札は、現状で破損したものも含め3863個が現存するが、欠失した痕跡が残る75個分を加えると総計3938個に及ぶ。また身頃と襟の縫い合わせ部分や裾・脇の部分等に

は、必要に応じて亀甲形を半切したものが縫いつけられており、その数は、破損したのもも含めて現存するものは172個、欠失したことが明らかな57個分を加えると229個を数える。

羽織の外形は、後身丈66.9cm、前身丈（左）76.3cm、（右）77.8cm、衿（左）67.0cm、（右）66.7cm、身幅（左）42.0cm、（右）41.8cm、袖幅（左）25.0cm、（右）24.9cm、袖丈（左）43.8cm、（右）44.2cm、袖口（左）19.1cm、（右）20.3cmであり、桃山時代から江戸時代初期の胴服（羽織）・羽織形陣羽織に見られる形状に類似する。

この羽織の形状における特徴は、（1）袖幅と身幅（後身幅）の比が、約1対1.68であること、（2）後身丈が前身丈に比べて8.3～9.9cm程度短い点、（3）袖口が小袖仕立てになっている点、（4）襟を表に反して着用する仕立てになっている点、（5）袖下から裾にマチが設けられていること、（6）前身頃に共裂の胸紐が付けられていることである。これを、形状が類似する室町時代末期から桃山時代の胴服・羽織と比較すると、この羽織が桃山時代の制作になるものと推論される（註5）。

また本作品の最も大きな特徴である、革製漆塗の小札については、これと生地としてともに用いられている木綿及び麻との機能上の関係性が興味深い。

麻芯が表と裏の木綿地の間に挟みこまれているが（図10）、これは、伸縮しやすい木綿が、革札を縫い付けた際に縫い糸に引っ張られて配置が不規則にならないように、また小札を固定する木綿の縫い糸をきつく引き絞りと、硬く固定できるように、と考慮してのことと考えられる。これは結果として、装着しての移動や不意の戦闘行為に際し、小札が微塵も動くことなく、しっかりと固定されていることをもたらし、防御という実用面でも重要な役割を果たすことになる。

こうした皮革と他の繊維素材との組み合わせへの配慮は、他の作品にも同様の事例が見られる。前述の池田光政所用とされる革袴と一具と考えられる林原美術館所蔵の羽織がそれである。



図10 表地と裏地間の麻布

3.2 林原美術館所蔵・伝池田光政所用革羽織について

松葉で燻してやや緑みを含んだ茶色に染めた革を表地に、瓢箪唐草模様の綾を裏地に用いて袷立てとしている（図11）。表地と裏地の間には、漆を表面に塗布した六角形の革小札を縫い留めた麻地を表地側に、無地の麻地を裏地側に配し、表裏の生地と直接摩擦することを避ける工夫がなされている（図12）。革の小札の形や大きさは、前出、紺木綿地革札付羽織に近い。革小札が麻地に縫い付けられているのは、麻が伸び縮みしにくく、かつ丈夫であることからと考えられる（図13）。

前出の袴同様、池田光政もしくは利隆所用と考えられるものであり、制作年代は桃山時代あるいは江戸時代初期と推定されるが、革小札の使用方法だけでなく、これと組みあわされる生地の使用方法においても、紺木綿地革札付羽織に非常に近いものがうかがわれる。

(法量)

身丈 背中心から裾87.2cm (背中心から45.2cmで背割丈42.0cm)

肩幅 前身頃左22.0cm、前身頃右21.5cm

前裾幅 左33.7cm、右32.7cm、後ろ裾幅 (=布幅)
88.0cm

襟幅 背中心11.7cm

前身頃左12.0cm、前身頃右 13.0cm

袖丈 左31.2cm、右33.0cm

袖付け 左42.5cm、右43.5cm

袖口 左18.5cm、右20.2cm

脇縫 左43.2cm、右41.5cm



図11 革羽織全体



図12 麻地に縫い付けられた革小札



図13 麻地への縫い付けの様子

まとめ

ここまで、桃山時代の制作になると推測される袴と羽織を調査した結果から垣間見られた、当時における木綿と皮革の使用実態の一端を紹介してきた。有力大名の戦衣においてさえ、木綿はそのごく限られた部分にしかなら使用されておらず、しかも意外な個所ではあっても、戦を行う武人にとっては生死を分ける重要な機能をもった部分に木綿が使用されていることがわかる。

これは、これまでの比較的少ない文献を根拠とした先行研究において、桃山時代に木綿が朝鮮などからは大量に輸入されていたとする説とは実情が一致しないことを示しており、更に研究を深める必要がある。

また革については、外衣として防風や防塵、防寒などの従来の機能に加えて、刀での攻撃に対応するために加工を加えて使用しているが、鉄に比べて軽量である点に注目して、移動時に特に多く着用された羽織にこれが使用されていることは、当時の武人の深慮のほどが窺える。この時代における革素材の実用についての研究も、これから研究の余地がある。

桃山時代における木綿の実態とさらに他の素材との共用のあり方については、このようにまだ明らかにされていない部分が多い、今後の課題として、これらを解明していきたいと思っている。

- 註1 ここで言う「桃山時代」とは文化史において慣例的に使用されている時代概念で、徳川家康の死去までをひとつの文化期とする。
- 註2 長崎巖「近世初期武家服飾における木綿の受容に関する一考 - 「浅葱木綿地日の丸扇散模様羽織」の制作年代と用途の検討を通して -」『総合文化研究所紀要』第23号（2017年）
- 註3 東京国立博物館所蔵・水浅葱練緯地葛模様三葉葵紋付辻が花染胴服の裏地など。長崎巖「東京国立博物館蔵・水浅葱練緯地葛模様三葉葵文付辻が花染胴服について」『MUSEUM』第585号（東京国立博物館、平成15年）参照。
- 註4 茶麻地緞り織胴服（室町時代・16世紀後半）、及び継ぎ合わせ麻地陣羽織（江戸時代・18世紀）などともに益田家に伝来した。
- 註5 この作品についての詳細は、「新発見の「紺木綿地革札付羽織り（こんもめんじかわざねつきはおり）」の制作年代と用途に関する一考察」共立女子大学『共立女子大学家政学部紀要』第62号（平成28年）参照。